

日本オリエント学会第 63 回大会 公開シンポジウム開催趣意書

大会実行委員長

高野 太輔（大東文化大学国際関係学部）

昨年度に引き続き新型コロナ禍が収束の兆しを見せていないため、ふたたびオンライン開催という形にはなりましたが、例年通り多くの方々が日本オリエント学会の年次大会に参加していただけることに篤く御礼申し上げます。

今大会では、久しぶりに歴史学の分野から「イスラーム初期史をいかに描くか」と題する公開シンポジウムを開催することにいたしました。以下は講演者の方々から寄せられたその趣意書となります。

イスラームの初期時代(七～八世紀)は、ムスリムにとって自らの信仰と行動の原点であり、すでに定まったものとしてのイスラームが存する場である。だが、この時代を歴史学研究の立場から眺めると、解釈も評価も定まらず、あらゆる方向に進む可能性を秘めた時代だといえよう。本大会シンポジウムでは、「イスラーム初期史をいかに描くか」というテーマのもと、すでに研究つくされ評価も定まっていると思われがちな、イスラーム初期時代の歴史的客体である、「ムハンマド」、「正統カリフ」、「イスラーム帝国」を取り上げ、これに新たな解釈と評価の視点を提示することを試みる。またこれに先立ち、イスラーム初期史研究に必須の史料研究について、現状と問題点を指摘する。ここで提示される結論はありうる解釈の一つであろうが、解釈と再解釈の営みの中に歴史学の真髄があることを感じ取ってもらえるのではないだろうか。

パネリストとしては、同分野の最先端で活躍されている歴史学研究者の方々にご登壇いただく予定です。ウェビナー開催の利を活かし、青森、千葉、京都、福岡、東京の日本各地を結んでのシンポジウムとなりますが、聴講者の皆様におかれましても、全国津々浦々からの参加をお待ち申し上げます。